

現代の ことば

かわせ
川瀬

いっし
慈

私はエチオピア北部の地方
都市ゴンダールで文化人類学
的なフィールドワークをす
めている。

ゴンダールはアスマリやラ
リベロッチなどの音楽職能者
の活動が盛んである。そして
私の定宿がある繁華街「テッ
サ地区」には、アスマリのよ
うな音楽職能者にはやや異
なるが、やはり芸をなりわ
いとしながら生きる人々が
大勢いる。なにがしかのパ

たどろろはジョーカーとい

あだ名で呼ばれる盲目の男性
は、竹製の横笛「シント」を
手に吹く。エチオピア北部特
有の五音階からなる短い旋
律は耳に心地よく、路上の雑
踏のなかに、みずみずしい風
を吹き込む。ジョーカーは
1日数時間、路上を行き来
し、ワシントを吹き、通行

路上の精霊たち



人から金をもらい暮らしてい
る。

また耳が不自由なアットウ
という中年の女性は身体を張
ったバフォーマンスで稼いで
いる。「おまえさん、おまえ
さん」と道行く人の腕を強引
につかみ、片方の乳房をあら
わにして赤子に乳を飲ませる
仕草で、自分には養うべき赤
ん坊がいることを訴え、金を
せがむのだ。道行く人々は、
アットウに赤ん坊なんていな

いこともちゃんと知っている
のだが、迫真の演技に敬意を
はらい、彼女の全身から放た
れる異臭に顔をゆがめつつ
も、小銭をさします。夕暮れ
時になると、アットウの仕草
を真似して彼女をからかう悪
ガキらが登場する。アットウ
は怒り声をあげながら石を投
げつける。当の本人は必死で
あるが、ほほ笑ましい光景で
ある。

ほかに、10代の少年であ
るゲタマの口笛も忘れがた
い。ゲタマは喉と口蓋で音を
共振させ、独特の不思議な音
色の口笛を吹く。同時に指で
頬をほじいたり舌で音を塗切
れさせたりして、口笛にアウ
セントを刻む。ピアッサの路

上ではゲタマのほかに口笛
で金を稼ぐ少年がいるが、み
な盲目である。彼らはゴンタ
ールから100km以上離れた
セミアン山脈の麓の村々か
らヒッチハイクでこのまち
にやってきた。ピアッサに來
れば、目が見えなくても芸で
何とか生きていけるからであ
る。

私はゲタマが盲目になった
理由を彼のイトコから聞いた
ことがある。それは、「4年
前の長い日照りが続いたあと
の大雨で大地から蒸気がわき
あがった。そのときゲタマは
ミチによって目が見えなくな
った」という内容であった。

ピアッサの人々は、物乞い
のことを「ピアッサの精霊」
（「イエ・ピアッサ・コシ」と
呼んでいる。路上の精霊たち
は、嘲笑や哀れみの眼差しだ
けでなく、親しみの感情と同
時に人のコントロールの及ば
ない超自然の存在として、ま
ちの風景の中に溶け込んでい
るのである。

（国立民族学博物館助教、映
像人類学・アフリカ研究）